

2025 年 8 月

武石 礼司

『論理的思考とは何か』を読む (2024 年 10 月出版、出版元：岩波書店)

渡邊雅子氏（現・名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授、コロンビア大学大学院博士課程修了。Ph.D.(博士・社会学)）が執筆した 2024 年 10 月出版の本書（岩波新書・新赤版 2036）は、発売以来、大きな評価を得ている。一見して、取っ付き難い書名であり、内容も何度も読まないで理解に達するのが難しい面があるが、それにもかかわらず多くの読者を獲得しているのは、納得できるだけの内容が、本書の各所に現れるためと思われる。評者も最近読んでみて、たいへん強い印象を受けたので本書を強く推奨するとともに、報告させて頂く。

本書は、渡邊氏が出版した以下の 3 冊の研究書の成果に基づいている。

- ・『「論理的思考」の文化的基盤－4 つの思考表現スタイル』（岩波書店、2023 年）
- ・『「論理的思考」の社会的構築－フランスの思考表現スタイルと言葉の教育』（岩波書店、2021 年）
- ・『納得の構造－日米初等教育に見る思考表現のスタイル』（東洋館出版社、2004 年）

上記 3 冊の研究内容を踏まえた上で、この新書版で広く読者に、この分野への入門としての道案内を試みたと記されている。さらに、本書の「おわりに」では、高校生でも読むことができる内容を目指したと記している。

ただし、本書は、当方が読んでも入門書としては内容が奥深く、しかも中東研究者にとって必須の内容が含まれており、この点で注目される。

本書の目的は、「アメリカ・フランス・イラン・日本の作文教育や歴史教育などの比較を通して、思考とその表現法の 4 つの基本型を提示。それによって、論理的思考と推論の型、価値ある能力が文化によって構築されている原理を明らかにする」ことであると記述されている。

中東研究者にとって本書が目を眩らされる点は、イランが含まれているところである。

本書では、論理的思考の「論理には文化的側面があることを指摘し、」「思考の『基本パターン』の側面と『文化的』側面の両面から答えていきたい」としており、「論理的思考法は世界共通でないゆえに、思考する目的を明確にして目的に合った思考法を選ぶ技術が要る。『経済』『政治』『法技術』『社会』の 4 領域に固有の論理と思考法を、各国の学校の『作文の型』に注目して抽出する。」として、アメリカ、フランス、イラン、日本の 4 カ国における小中高の作文教育の違いを分析している。

4 カ国ともそれぞれ、他の国の成果物の目的、手段、主導的観点、価値、教育法などの面

で大きく異なっており、4カ国それぞれの中でも、他の国の成果物に落第点を付けてしまうほどの大きな差異があると考えられる。評者の見るところ、特に、イランの小中高の作文の書き方に関する教育が、他の3カ国、アメリカ、フランス、日本と大きく異なっていると思われる。

本書の表3-1 (p.141) に示される四領域の価値観、論理、思考法によれば、作文の中心的価値(目的)は、米国(経済領域)では効率性と目的の達成にあり、フランス(政治領域)では公共の利益が最も重要であり、イラン(法技術領域)では真理の保持と規範の順守が最も重要とされる。日本(社会領域)においては、共感と哀れみこそが重視される、と説明されている。

作文の目的に関して見ても、米国では、「論証・説得」が重要で、フランスでは「矛盾の解決」が重視され、イランでは「真理と規範の伝達」が目的であるとされ、日本では「道徳的感情の涵養」が目的であると説明されている。

このように4カ国の学校教育における作文作成の目的を抽出したのみでも、各国の特徴が全く異なっていることが示されている。本書を読むことで、なぜ私達と他地域の人々との議論が噛み合わず、空転を繰り返すのかを窺い知ることができるのではないだろうか。

本書によれば、イランの学校教育において行われる作文・創作(エンシャーと呼ばれる)は「ことわざや詩の一説で最後を締めくくる」ようにと教えられており、即ち、締めくくりの記述は、「絶対的な権威を持つ知識、たとえば第一原理を示す書物や聖典、ことわざなどによって個人の外から与えられるものである」とされる。

上記のイランのポジションに関しては、評者もイラン訪問時に感じたことがあるので、付け加えておきたい。

かつて、イラン外務省付置の研究機関が、テヘランで、日・英・イランの3カ国の研究者を集めた小規模な会議を企画し、日本から当方を含めた2人、英国からチャタムハウスの研究者2人、イランからはテヘラン大学の教授が出席してシンポジウムを行った。

日本側、英国側からの出席者が、それぞれが抱く課題と、参加した3カ国による議論の意義などを述べた後、テヘラン大学の教授がシンポジウムの意義を話し始め、その後、次第に口調が熱を帯びて、イランで有名な詩人の詩のペルシャ語での朗読へと移行していき、延々と止まるところを知らずに続くこととなった。シンポジウムが、そのまま時間切れで終了してしまったのである。

そもそも、当方は、テヘラン到着後、イラン外務省がアテンドしてくれて、ホテルに荷物を置いた後、まだシンポジウム開始まで時間があつたので、イラン外務省の若手職員より、「是非、お連れしたいところがあるので案内します」というので車に乗せてもらい向かったところが、イランの有名な詩人のお墓(廟)であった。

こうした事例から見ても、敬愛すべき詩人を極めて大事にしているのがイランの人々であると言える。

イランにおける作文教育（エンシャー）の教育効果は、本書にも記されているように脈々と受け継がれており、本書が示すように、他国（他領域）の「思考法はなぜ、どのように非論理的と感じるのか」（特に、米国から見た日本やイランなど）を再度、より深掘して考えてみる必要があるのは間違いない。

中東に関りを持つ人々においては、イランに加えて、他の中東地域も含めたより様々な地域を対象とし、本書関連の研究と議論をより深化していくべきと言える。本書が示唆するところは極めて重要かつ重大であり、示唆に富む研究結果が大胆な比較研究の成果として生み出されたことを感謝したい。

武石礼司 アラブ調査室・室長